

脳神経外科に通院中の患者さんまたはご家族の方へ（臨床研究に関する情報）

当院では、以下の臨床研究を実施しております。この研究は、患者さんの診療情報を用いて行います。このような研究は、厚生労働省・文部科学省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」（平成 26 年文部科学省・厚生労働省告示第 3 号）の規定により、研究内容の情報を公開することが必要とされております。この研究に関するお問い合わせなどがありましたら、以下の問い合わせ先へご照会ください。

[研究課題名] 頭蓋内胚細胞腫における(1)bifocal tumor の意義、(2)髄液細胞診陽性症例の治療についての後方視的研究

[研究機関名・長の氏名] 北海道大学病院 秋田 弘俊

[研究責任者名・所属] 山口 秀 （脳神経外科・講師）

[研究代表機関名・研究代表者名・所属]

東北大学大学院医学系研究科 神経外科学分野 准教授 金森 政之

[共同研究機関名・研究責任者名]

旭川医科大学脳神経外科	鎌田恭輔・安栄良悟
札幌医科大学脳神経外科	三國信啓・秋山幸功
秋田大学脳神経外科	清水宏明・小田正哉
山形大学脳神経外科	園田順彦・松田憲一郎
東北大学神経外科学	富永悌二・斎藤竜太
独協医科大学脳神経外科	植木敬介・宇塚岳夫
筑波大学脳神経外科	松村明・松田 真秀
埼玉医科大学国際医療センター包括的がんセンター脳・脊髄腫瘍科	西川亮・鈴木智成
埼玉県立小児医療センター血液・腫瘍科	康勝好
東京大学脳神経外科	斉藤延人
日本大学脳神経外科学	吉野篤緒・山室俊
杏林大学脳神経外科	永根基雄
東京医科大学脳神経外科	秋元治朗
東京慈恵会医科大学小児科	山岡正慶
北里大学脳神経外科	隈部俊宏・柴原一陽
昭和大学藤が丘病院小児科	磯山恵一・山本将平
信州大学脳神経外科	本郷一博・金谷康平
浜松医科大学脳神経外科	難波宏樹・徳山勤
富山大学脳神経外科	黒田敏・富田隆浩
名古屋大学脳神経外科	若林俊彦・夏目敦至・本村和也

名古屋市立大学脳神経外科	間瀬光人・坂田知宏
三重大学病院脳神経外科	鈴木秀謙・畑崎聖二
滋賀医科大学脳神経外科	野崎和彦・深見忠輝・設楽智史
京都大学病院脳神経外科	宮本亨・荒川芳輝
大阪医科大学脳神経外科	黒岩敏彦・池田直廉
大阪医療センター脳神経外科	金村米博・木嶋教行
関西医科大学脳神経外科	浅井昭雄・埜中正博
近畿大学脳神経外科	泉本修一
和歌山県立医科大学脳神経外科	中尾直之・深井順也
神戸大学脳神経外科	甲村英二・篠山隆司
鳥取大学脳神経外科	黒崎雅道・神部敦司
愛媛大学脳神経外科	高野昌平
九州大学脳神経外科	飯原弘二・空閑太亮
久留米大学脳神経外科	岡基浩・中島慎治
福岡大学脳神経外科	上亨・安部洋
佐賀大学脳神経外科	部竜也・中原由紀子
長崎大学脳神経外科	尾孝之・氏福健太
熊本大学脳神経外科学	笠晃丈
鹿児島大学脳神経外科	吉幸司・比嘉那優大

[研究の目的]

頭蓋内胚細胞腫は東アジアに頻度が高く、欧米においてはかなり稀な疾患です。本年頭蓋内胚細胞腫の診断と治療に関する国際グループによる診断・治療・予後に関する 34 項目のコンセンサスが発表されましたが以下の 2 つの問題については、解明すべき重要な問題として検討されることになりました。

- (1) 尿崩症を伴う多発腫瘍で腫瘍マーカー陰性の場合、ジャーミノーマと診断してよい、という仮説はどの程度正しいか

ジャーミノーマにおいては、松果体と神経下垂体同時発生の多発病変は胚細胞腫であると考えられ、さらに『尿崩症あり』『腫瘍マーカー陰性』の症例は高い確率で、ジャーミノーマであり、生検は不要という考え方が存在します。これが正しいければ、組織診断のための手術を行わないで、治療を開始することによって治癒させることが出来るため患者にとってのメリットは大きいと考えられます。

そのため、上記 3 条件を満たす症例を多数例集積し、ジャーミノーマである確率、ジャーミノーマ以外である確率を調べたところ、このような症例は約 90% がジャーミノーマであることが判明しました。しかしながら、さらに組織生検に伴うメリット、デメリットを明らかにする必要があると考えました。これらについて検討を加えます。

- (2) 髄液細胞診陽性のジャーミノーマにおいて、全脳脊髄照射が必要かどうか。

術前の髄液細胞診検査において陽性である場合、治療の範囲を頭蓋内だけではなく脊髄まで対象に加えるかどうか、一定の見解はありません。そこで、髄液細胞診陽性であった症例において、治療前の MRI での拡がりを検討し、画像所見との相関を明ら

かにするとともに、照射範囲ごとにどのような臨床経過をたどったかを後方視的に検討し、適切な照射範囲について明らかにすることを目的に検討しました。その結果、再発率には全脳全脊髄照射では差はないという結果で、全脳全脊髄照射は必ずしも必要ではないことが示唆されましたが、検査の時期が一定でないなどのさらなる問題点が出てきたため、再度大規模に調べることとなりました。

[研究の方法]

○対象となる患者さん

頭蓋内胚細胞腫瘍の患者さんで、2008年1月1日以降、当院で治療を受けている方

○利用するカルテ情報

診断名、年齢、性別、身体所見、検査結果（血液検査、画像検査など）、病理診断結果、予後

この研究は、胚細胞腫瘍の患者さんの治療を行っている上記機関で実施します。上記のカルテ情報を、後方視的な解析のために、東北大学に電子的配信で送付します。

[研究実施期間] 実施許可日～2024年1月31日（登録締切日：2023年12月31日）

この研究について、研究計画や関係する資料、ご自身に関する情報をお知りになりたい場合は、他の患者さんの個人情報や研究全体に支障となる事項以外はお知らせすることができます。

研究に利用する患者さんの情報に関しては、お名前、住所など、患者さん個人を特定できる情報は削除して管理いたします。また、研究成果は学会や学術雑誌で発表されますが、その際も患者さんを特定できる情報は削除して利用いたします。

*上記の研究に情報を利用することをご了解いただけない場合は以下にご連絡ください。

[連絡先・相談窓口]

北海道札幌市北14条西5丁目

北海道大学病院脳神経外科 担当医師 山口 秀

電話 011-706-5987 FAX 011-708-7737